

道徳性の発達における均衡化の過程に関する一考察

椋木 香子

A Study about the Process of Equilibration in Moral Development

Kyoko MUKUGI

1. はじめに

我が国の学校教育における道徳教育では道徳性を養うことが目標とされている。ここでいう道徳性とは「道徳的な心情、判断力、実践意欲と態度など」¹と定義されており、『小学校指導要領解説道徳編』では、これらは「道徳性を構成する諸様相」と捉えられている。

これに対し、「道徳性の発達」に関し、近年我が国で注目されるものとして、コールバーグ (Kohlberg, L.) の認知的発達理論に基づくモラル・ジレンマ授業がある。これは、モラル・ジレンマ (道徳的価値葛藤) が起きるような葛藤場面に對し、「この場合、どうすべきか」を二者択一で選択するとともに、その理由について考え、意見交換しあう中で、より高い道徳性発達段階へ至るよう促す授業方法である。つまり、より高い道徳性発達段階へ至ることが道徳性の発達とされている。

しかし、より厳密には、コールバーグの道徳性発達過程についての立場は「道徳的認知構造内の矛盾一再組織化」であり、「均衡化 (equilibration) の過程」と呼ばれている。つまり、「発達の過程とは、自分のもつ道徳的な考えの枠組みでは矛盾を生じさせることが認識され、その矛盾を解消するような新しい枠組みを構成すること」²であり、このアイデアはピアジェ (Piaget, J.) に拠るとされている。

道徳性の発達を「道徳的認知構造内の矛盾一再組織化」、すなわち、「均衡化の過程」と捉えるならば、モラル・ジレンマ授業によらなくても、そのような過程が起こるような授業を行えばよいことになる。しかしながら、具体的に子どもがどのような道徳的認知構造を持つのか、どのように「均衡化」が起こるのかは明らかにされていなかった。そこで筆者は「道徳の時間」内での子どもの道徳的価値獲得に関する研究を行い、均衡化の過程のモデルを提示した³。しかし、質的研究の手法によるため、事例からの分析・考察が中心となっており、「均衡化の過程」についての理論的な考察は割愛されている。

そこで本論では、「均衡化の過程」に関するコールバーグとピアジェの見解を検討し、そこから道徳性の発達における「均衡化の過程」について考察する。

2. コールバーグの認知的発達理論における「認知構造の再組織化」

コールバーグは自身が中心に行ってきた調査結果から、道徳性の発達が同一化や賞罰による規範や価値の内面化の結果ではないと考えるに至り、それに代わるものとして、道徳教化の「認知発達の理論」⁴を提示した。デューイ、G・H・ミード、ピアジェらにも共通する一連の仮説をコールバーグは「認知発達の」と呼んでいるが、それらは「自己と社会に関する概念の認知的・構造的な変化を表わす道徳性の発達段階の存在を仮定」⁵している。したがって、道徳教育を「普遍的な道徳上の真理を伝達する過程ではなく、子どもが自分の経験を再構造化するのを促すものとして」⁶捉えることとなる。

ここでコールバーグは、「認知的」というときの問題を2点指摘している。第一に、「道徳判断や道

徳規範は、他者の外的状態や内的情緒を受動的に反映するものとしてでなく、究極的には行為主体の普遍的な構成体として理解されるべきで、それがその人の社会的相互作用を規制すると理解されるべき⁷であるということである。道德性の原理的段階より低い段階では、「正邪」が判断する人の外部にあり、絶対的なものであると単純に仮定されており、慣習的段階でも客観的な「正邪」のもとに道德的判断⁸を行うと信じこんでいるが⁹、道德的判断は判断を行う人の認識の問題であり、認知的発達の一般的な原理・理論で分析することが心理学的に正しいとコールバーグは指摘している¹⁰。つまり、「何が道德であるか」「何が道德的であるか」といったことは判断を行う者の外部に予め存在しているのではなく、判断を行う主体がどのように認知していくかという問題であるという立場に立っており、道德的判断や道德規範は行為主体が構成したものであるということである。

第二に、「認知発達の見解では、『認知』と『感情』とは同じ心的事象の別々の側面、あるいは同じ心的事象に対する異なった視点であり、あらゆる心的事象は認知的側面と感情的側面の両方を持っており、また心的性質の発達は認知的な視点と感情的な視点の両方に認められる構造的変化を反映するものとする¹¹」ということである。認識と感情に関する論議においては、両者を別の精神状態と仮定し、道德的判断で認知と感情のどちらが影響が大きいかを問題とすることがあるが、コールバーグらの立場はそうではないことを明言している¹²。道德的判断は判断する人の感情や情操に大きくかわり、道德的判断における感情の質は、道德的秩序に関する子どもの認知構造の発達によって決まるのである¹³。

以上の前提に立ち、コールバーグは道德的判断における3水準6段階の道德性発達段階を設定した(表1)。レストやテュリエルらの研究から、子どもたちは自分より低い段階の思考例を否定し、自分より一段高い段階の思考例を取り入れることが明らかにされているが、一段階上の思考の単なる受動的接触は発達段階の向上の条件ではないことも指摘されている¹⁴。そこでコールバーグは「次の段階への移行は、外部から難しい内容が単に付け加わるのではなく、内面的な認知構造の再組織化を意味していると考えられ¹⁵」と述べている。

さらに、コールバーグは「一般的な認知的発達論に従って、認知的葛藤や認知的不安定こそが、このような再組織化や上位段階への以降の中心的な『原動力』もしくは条件である¹⁶」というテュリエルの仮説を提示し、内的再組織化につながるような葛藤が役割取得によって誘発されることを示唆している¹⁷。

以上から、コールバーグのいう「認知構造の再組織化」は、道德的判断の基準である道德性発達段階における次の段階への移行を意味しており、その意味で道德性を発達させることであると言える。その要因は認知的葛藤や認知的不安定であると考えられるが、ここでいう「認知的」とは行為主体の認識作用を指し、道德規範そのものの認知を意味するものではない。また、認知と感情は相対する概念ではなく、同じ心的事象の異なる側面であり、同様の構造的変化を伴うものと考えられる。

<表1 コールバーグの道徳性発達段階¹⁸>

前慣習的水準	第1段階：他律的道徳性 (罰と服従志向)
	第2段階：個人主義的、道具主義的な道徳性 (道具主義的相対主義者志向)
慣習的水準	第3段階：対人間の規範による道徳性 (対人関係の調和あるいは「良い子」志向)
	第4段階：社会組織の道徳性 (「法と秩序」志向)
脱慣習的水準	第5段階：人間としての権利と公益の道徳性 (社会契約的遵法主義志向)
	第6段階：普遍可能であり、可逆的であり、指令的な一般的倫理的原理 (普遍的な倫理的原理志向)

3. ピアジェの「均衡化」概念

ピアジェの認知的発達理論における道徳的判断の研究としては、『子どもの道徳判断』(1932)に収められている子どもの遊びであるマープル・ゲームの規則の認識の発達に関する研究¹⁹がよく知られている。しかし、日下によれば、ピアジェの思想のベースに「均衡化 (equilibration)」概念があり、それが生涯を通じたテーマであったと考えられる²⁰。ピアジェの子どもの道徳的判断に関する研究はピアジェの初期の研究にあたり、「均衡化」概念もその後、発展していく。したがって、ピアジェの「均衡化」概念は道徳性の発達に限られたことではなく、彼の認識論全体に関わる重要な概念であったと考えられる。ここでは、日下の研究にしたがって、ピアジェの「均衡化」概念を概観する。

日下はピアジェの均衡または均衡化論を6つの時期に分けて詳細に検討し、特徴づけて説明している(表2)。ピアジェの均衡概念・均衡化概念の生成・発展の検討から、日下は次の4つの特徴を挙げている²¹。

第1に、表2からも分かるように、均衡概念から均衡化概念への発展が見られることである²²。つまり、状態としての「均衡」からプロセスやメカニズムを示す「均衡化」に関心が移ったということである。日下はそれに対し、「環境とシステムとしての有機体と相互作用におけるシステムの単なる動的平衡または均衡の自己維持という段階を超えて、さらにシステムそのものの自己組織化を意味する均衡化を構想したのではないか」²³と考えている。

第2に、均衡概念・均衡化概念ともに、ピアジェにおいては、あらゆる分野に適用しうる一般的な概念として構想され、適用されていることである。青年期には有機体や社会、認識などに、初期には個人間の社会的関係に、中期には知能の領域に適用されている。

<表2 ピアジェの均衡または均衡化論の特徴²⁴>

時 期	年 代	特 徴
青年期	1910 年代	有機体論に基づく質的レベルでの全体と部分の均衡論
初期	1920 年代	社会的関係に適用された全体と部分の均衡論
中期	1930~1940 年代	知能の同化と調節との均衡論および知能構造の均衡論
後期前半	1950 年代	第4の発達要因およびシステムの補償的調整作用としての均衡化
後期後半	1960 年代	システム一般の自己調整としての均衡化論
晩年期	1970 年代以降	認知システム論に基づく補償的自己調整としての均衡化論

第3に、均衡・均衡化の形態は、基本的には質的なレベルでの有機体論的な全体と部分との均衡であるということである。ただし、1930年代の研究に見られる「同化と調節との均衡」のように、機能的なレベルで説明する場合もある。

第4に、思想的基盤として有機体論とシステム論があり、当時流行した構造主義などの新しい思想の影響があることである。日下は、「ピアジェは心理学者である前に認識論者」²⁵であると述べ、均衡化概念を心理学の枠内でとらえることの限界を指摘している。

晩年期の研究では、ピアジェは均衡化概念を3つの形式に整理した²⁶。第1に「主体と対象との間の均衡化、または同化と調節の均衡化」、第2に「下位システム間の均衡化」、第3に「全体と部分との均衡化、または分化と統合の均衡化」である。ここで注意しなければならないのは、これらすべては認識システムとその発達の領域に関するということである。つまり、第3の「全体と部分」が指し示しているのは主体の認識の全体と諸部分を指すのであり²⁷、社会的関係における集団や社会といった全体と個人を指すのではない。この点を踏まえた上で、次に道徳的判断との関連を考察する。

4. 道徳的判断における均衡概念

『子どもの道徳判断』は1932年のピアジェの著作であるが、日下は初期の1920年代の研究に位置付けている。このときの主要概念は「均衡」であり、「協働（協同）」²⁸という個人間の社会的関係における全体と部分との均衡を意味している²⁹。ピアジェは子どもの規則の認識が、大人への一方的尊敬に基づいて規則を義務的なものと捉える他律的なものから、子ども同士の相互的尊敬に基づき、調整可能なものとして規則を捉えることができるようになる自律的なものへと発達することを明らかにした³⁰。その際、ピアジェが重視しているのが「協働（協同）」である。

「協同は自己中心性を特徴づける自発的確信と、大人の権威への盲目的信仰との両者を抑制する」³¹と同様に「自己中心性と道徳的実在性の両者を抑圧し、かくて規則の内面化を達成する」³²。つまり、自己中心性を特徴とする子どもの個人的判断と、規則などが客観的存在していると考え、大人への一方的尊敬に基づいてそれを盲目的に受け入れることの両方がいわば止揚され、子どもの中に内面化されると考えたのである。この「協働（協同）」が成り立つためには、個人と、個人の集まりである全体との均衡が理想の状態だと考えており、その意味では、この時点でのピアジェの「均衡」は個人間の対等な関係を意味する概念であったと考えられる³³。

これに対し、コールバーグは『子どもの道徳判断』に関して次のように述べている。「ピアジェの

主張によれば、論理が思考作用の理想的な均衡を表しているのと同じように、正義は社会的相互作用の理想的な均衡を表しており、相互性もしくは可逆性が、論理的均衡と道徳的均衡の両方にとって中心的条件となっているのです。…（中略）…正義の発達に関するピアジェの解釈の細部については異論がありますが、正義の発達を相互作用の中から生ずるものとするピアジェの基本的考え方には賛成です³⁴。ここでは、思考作用の論理的均衡という、主体の思考の内部での均衡と、正義が社会的関係の均衡に基づいているという意味での、外在する均衡が看取できる。

ピアジェ自身の記述の中にも、子どもの初期の知能における活動について、「理想的平衡の存在を認めなければならない。そのようなものがアプリアリである。…（中略）…それは不均衡の現状とそしてやがて実現されるはずの理想的均衡との間の区別を包含している機能的関係の総和なのである」³⁵と述べている部分もあり、主体内での均衡が想定されていると考えられる。

この後、ピアジェ中期の研究では、知能の領域における均衡にテーマが移っていく。そこでの「均衡」は「適応 (adaptation)」、すなわち「同化と調整の均衡」を意味するようになる。日下によれば、この時期、「適応」とともにピアジェの均衡論の特徴となるのが「組織化 (organization)」である³⁶。ピアジェにおいては、知能のシステムには「適応」と「組織化」があり、前者がシステムと外的環境との均衡を意味するのに対し、後者がシステム内の均衡を意味する。つまり、「適応」は主体と外界との均衡であり、「組織化」は主体内部の均衡である。両者は相補的で相互依存的な関係と考えられ、同じ現象をシステムの外的側面と内的側面から論じたものであると日下は考察している³⁷。

コールバーグの見解と日下の研究を総合して考察すれば、道徳性の発達における均衡には、主体の認知構造と社会的関係や外的環境といった外界との均衡と、主体の認知構造内部における均衡があると考えられる。それは相補的・相互依存的な関係と考えられ、同じ現象の別な側面であると考えられる。

しかしながら、ピアジェの研究全体からみれば、この時期の均衡論は発展途中であり、晩年に形式化した3つの認知システムおよびその発達と道徳的判断および道徳性の発達との関連は検討の余地があると思われる。

5. 道徳性の発達における均衡化の過程

以上から、道徳性の発達における均衡化の過程について、以下の点が考察される。

第1に、道徳性の発達における均衡の2側面である。それは主体の認知構造と外界との均衡と、主体の認知構造内部における均衡である。両者は相互の関係にあると考えられる。コールバーグが示した6段階は、各段階での均衡状態における判断基準を示していると考えられる。

第2に、「認知構造の再組織化」はより高い段階への移行を意味するということである。その意味では、「均衡」している状態よりも、「均衡化」というプロセスを検討することが、道徳性をどのようにして発達させるかという教育方法の問題に関係すると考えられる。

均衡化の過程は、主体の認知構造内の問題と考えられるが、均衡の2側面の相互関係を考慮すれば、外界との均衡化が主体内の均衡化に影響を与えることは十分推測できる。コールバーグの道徳性発達段階で説明するならば、各段階の一段上の段階の思考例が外界であり、それに触れることで主体の認知構造との均衡化が起こるということである。それは同時に主体の認知構造内部の均衡化をも意味する。コールバーグの認知的発達理論に基づくモラル・ジレンマ授業とは、このような主体の認知構造と外界との均衡化を目指したものであろう。

しかし、コールバーグも指摘しているように、より高い思考例の単なる受動的な接触では、必ずしも均衡化が起こるわけではない。認知的葛藤や認知的不安定といった別の要因について考察する必要がある。つまり、主体の認知過程を検討する必要があると考えられるのである。

この点についても、ピアジェの均衡化概念が示唆するところが大きいと考えられる。ピアジェが晩年に定式化した3つの均衡化概念を含めた均衡化の過程と道徳性の発達との関連についての検討は今後の課題としたい。

注

- 1 文部科学省『小学校学習指導要領』東京書籍、2008年、102頁。
- 2 日本道徳性心理学研究会『道徳性心理学—道徳教育のための心理学』北大路書房、1997年、53頁、参照。
- 3 椋木香子「道徳的価値獲得における主体の思考過程に関する実践的研究」（学位論文）2008年、未刊行。
- 4 ローレンス・コールバーグ他著／岩佐信道訳『道徳性の発達と道徳教育』広池学園出版部、1994年、85頁。「認知発達の理論」と「認知的発達理論」は同じものであるが、ここでは訳に従い、前者のままとする。
- 5 同前書、85頁。
- 6 同前書、86頁。
- 7 同前書、86頁。
- 8 引用の場合は訳に従い「道徳判断」と表記するが、その他は「道徳的判断」と表記する。
- 9 道徳性の段階については表1を参照。
- 10 ローレンス・コールバーグ他著／岩佐信道訳、前掲書、87頁、参照。
- 11 同前書、87頁。
- 12 同前書、87頁、参照。
- 13 同前書、88頁、参照。ただし、感情の役割の大小は道徳判断の構造と発達を理解する上でさほど重要ではないとコールバーグは述べている。一方、ライマーらの研究によると、ピアジェは道徳的判断における感情をより積極的に位置づけていると考えられる（J・ライマー、D・P・パオリット、R・H・ハーシュ／荒木紀幸監訳『道徳性を発達させる授業のコツ—ピアジェとコールバーグの到達点』北大路書房、2004年、35-40頁、参照）。
- 14 同前書、94頁、参照。
- 15 同前書、94頁。
- 16 同前書、94頁。
- 17 同前書、95頁、参照。
- 18 日本道徳性心理学研究会、前掲書、56-57頁、および、ローレンス・コールバーグ他著／岩佐信道訳、前掲書、171-173頁より作成。
- 19 ピアジェ／大伴茂『臨床児童心理学 Ⅲ 児童道徳判断の発達』同文書院、1964年、道徳性心理学研究会、前掲書、29-36頁、小笠原道雄編『道徳教育原論』福村出版、1995年、33-34頁、参照。

- ²⁰ 日下正一『ピアジェの均衡化概念の形成と発展』風間書房、1996年、参照。
- ²¹ 同前書、198-202頁、参照。
- ²² 同前書、198頁、参照。
- ²³ 同前書、198-199頁。
- ²⁴ 同前書、194-195頁より作成。
- ²⁵ 同前書、200頁。
- ²⁶ 同前書、160、166頁、参照。
- ²⁷ 同前書、160頁、参照。
- ²⁸ 大伴訳（1964年）では「協同」となっているが、日下は「協働」と訳している。訳語の検討は本論では十分なされていないため、今回は「協働（協同）」と併記する。
- ²⁹ 日下、前掲書、196頁、参照。
- ³⁰ ピアジェ、前掲書、101-129頁、参照。
- ³¹ 同前書、570頁。
- ³² 同前書、570頁。
- ³³ 日下、前掲書、42頁、参照。
- ³⁴ ローレンス・ローレンス・コールバーグ他著／岩佐信道訳、前掲書、99頁。
- ³⁵ ピアジェ、前掲書、565頁。
- ³⁶ 日下、前掲書、66頁、参照。
- ³⁷ 同前書、69-71頁、参照。

